

ボクがマイケル

だったころ（二）

赤木 マリオ

そもそもボクたちに、心というものがあるのかなのか。あるに決まっている。ではどこにあるのか。これが結構難しい。そこまで行くと、返答できない。でも、熱い血が流れていることだけは確かだ。

昔のヨーロッパでのことだが、ボクたちのことを機械扱にする高名な合理主義哲学者がいた。その男は、嬉しそうに近寄ってきた雌犬の腹をけ飛ばした。雌犬は妊娠していた。悲しく苦痛に満ちた声を挙げながら雌犬は逃げた。鳴き声を上げて逃げるその母親犬を指さして、笑いながら哲学者は言い放った。

「奴らは何も感じていないさ。機械、だもの」
その雌犬とおなかの中の子はどうしただろうか。その場に

いたなら、噛みついてやるところだった。

この男は自分の信念を見せつけるために、そんな行動をとったのだが、もつと冷酷な輩は大勢いる。動物の苦痛の叫びや流れる血を、まったく無感覚に受け流して、冷酷な態度をとる者も多い。それに引きかえ、カラマーゾフの少年などは、犬にピンを食わせたために、心に重荷を抱いて、死の床でも苦しんでいたのだ。人間というのは様々で、奇妙な動物だ。

オヤジがまだ幼稚園児のころ、銭湯から出てくるのをいつも待つていたものだ。首輪を外してもらい、自分だけで、おとなしく行儀よく待ち続けた。人にかみつくなどということはもちろんなかった。雑種でシロと呼ばれていた。誰もがボクを撫でた。撫でてもらうのは嬉しい。

長い時間待つたあとの再開は嬉しかったが、オヤジはいつもそっけなかった。ボクに触れもしなかった。犬がこわかったのだ。寂しかった。それでもその習慣はしばらく続けた。

その後、ボクは病気になる。息も絶え絶えで臥せていた時、オヤジの父親が水を与えようとしたが、ボクは振り払った。その時、ボクの犬歯が彼の手のひらを少し引き裂いた。本気で噛みついたのではない。オヤジの父親はかなり痛がっていたが、ボクに罰を与えることはなかった。た、た、その時以来、犬に近寄らないようにと、オヤジは父親から言い渡された。オヤジは以後、犬をますます警戒するようになった。

苦しい闘病の結果、ボクは段ボールに詰められ、郊外に運ばれることになった。オヤジの父親の父親、つまりオヤジの

ジイチャンは孫連れてボクを葬りに行ったのだ。

町はずれの乾いた畑の土に、ボクは白く長い脚を天に向けて、埋められようとしていた。その頃は白かったのだ。オヤジは見ていた。広い畑の中に埋められるボクの姿を。オヤジの脳裏には、今もその光景が残っているはずだ。ボクの遺骸を、金色の夕日が照らしていた。オヤジは美しくも恐ろしい光景を見た。生涯消えない記憶になっただろう。

気が付くと、大阪の貧しい下町で、雨に打たれてドブに落ちそうになっていた。雑種で赤毛の姿だった。オヤジの叔父が、震えるボクを見つめ、気まぐれに拾ったのだ。その叔父は、ろくに仕事もしないで、自堕落な生活をしている人間だが、野良犬に生まれ変わったボクを、憐れに思う気持ちは残っていたのだ。でも、地道に世話などできるはずもなく、結局実家に預けに来た。

家の誰もが、厄介者が厄介なものを持ち込んだと、迷惑顔だった。オヤジは拾われたボクを、当初から毛嫌いだ。厄介者の叔父が持ちこんで、家族とひと悶着する様子を見ていたからだ。叔父とボクが一体の印象として受け取られたのだ。名前さえ付けられなかった。

しばらくは家で預かることになったが、皆が嫌がるので、結局捨てられることになった。どこかも知れない公園に置き去りにされた。オヤジと父親はバスに乗って帰路に就いた。気づいたボクは必死で追いかけた。気が動転した。必死で走ったが追いつかなかった。心臓が止まるかと思われた。

「父ちゃん、追いかけてくるよ」

バスの乗客は見ていた。

「おい、犬が追いかけてるよ」

オヤジはボクのことよりも、周囲の目を気にかけていた。素直にボクを心配できなかったのだ。

オヤジと家族は、もうボクは帰ってこないと判断していた。そうはいかないさ。ボクは帰りたいのだ。その家に。夜が明けけるころ、ボクはやつとの思いで家にたどり着いた。ガリガリと玄関を掻きむしった。家族はかなり驚いていた。でも、翌日には保健所に連れて行かれ、殺処分にもされたのだ。ボクは恐ろしさのあまりブルブル震えていた。小部屋で息をした途端、鼻腔と肺に、何やら少し熱いものを感じた。これでおしまいだ。名無しのまま昇天するしかなかった。

わが家は犬が育たない。口癖のようにオヤジの父親は言っていた。ところがやはり犬好きなのか、またぞろボクを連れてきた。今度は白と黒毛の雑種だ。コロと名付けられた。

オヤジは小学校の六年生だった。ボール遊びをし、かくれんぼうをしてくれた。もともと世話というものはしてはくれなかった。ただ気が向いたときに遊んでくれただけだ。でもボクと初めて親しく打ち解けた。数か月程度、幸福な時を過ごした。だがそれも長くは続かなかった。

ボクは戸外の犬小屋で寝起きしていた。ある日の早朝、食べ物のいい匂いにつられて、身を起こした。あさましいのではない。ボクたちは食べることが生きることだから仕方ない。

途端、脳天に爆裂音がした。鉄パイプがボクの脳天を打ち砕いたのだ。「クウ」と一瞬息を吐き、ボクは即死した。男は手慣れた様子でボクを麻袋に入れ、さっさと立ち去ってしまった。家の誰もが全く気付かなかった。残された少しの血痕がすべてを語っていた。それ以来、その家では犬が飼われたことがない。

その後、ボクは放浪した。まずは、ウラル山脈にはじまり、アルタイ山脈へと流れた。ほとんどを野犬として過ごした。たまに人に飼われることもあったが、食べられたり、殺されたりしながら何度も転生した。次にタクラマカン砂漠を通過し、カラコルム山脈からヒマラヤ山脈を越え、インドに至った。ガンジス川で沐浴したこともある。おかげで血便、白濁便でのたうちまわって昇天する羽目に陥った。

世界のさまざまな地域で、どんなに悲惨な出来事に会っても、ご大層な悟りなど得ることがなかった。また、どこかの小説家たちのように、悲惨な世界を見て、「イエス」とうそぶくことなどとてもできない。支配の頂点にいる人間の存在と行為を肯定しているにすぎない。この世界をつくった創造主へのおもねりだよ。ボクは「ノー」と言う。生きること、は、所詮骨折り損のくたびれもうけだ。それでも生きなければならぬとは、最悪極まりない。何をやっても、結局この世界の仕組みに飲み込まれてしまう。生きなければならぬ以上、そこからの脱出は不可能だ。最後の切り札をふところに、絶望しながら耐え忍ぶしかない。

そんなこんなで、買われた挙句、またまたオヤジの家に舞い戻ることになった。そう、黒柴のマイケルとして。

犬の生涯と感想といっても、いったん飼い犬になれば、よほどの天変地異がない限り、平凡な生活があるだけだ。そのあたりの事情は人間と変わらない。ボクたちの場合は、飼い主が生殺与奪の権を握っている。その飼い主でさえ、無意識のうちに取り巻く環境、境遇に支配されている。飼われているだけでも幸せだと、知人は言った。マイケルとしては、しばらくの間、平々凡々の平和で幸福な日々を過ごしたことになる。

カアチャンは腰痛持ちのオヤジを出勤させるために、毎朝車で最寄りの駅までアツシくんをする。ボクの定席はオヤジの膝の上だ。窓から身を乗り出し、戸外の匂いを嗅ぐ。情報収集と言うところだ。わが身に、いつ何が起ころうかしのいので、そのための心がけなのだ。駅近くになり、オヤジが下りるところになると、なぜか喉の奥から「クウ、クウ」と声が出る。オヤジを下すと、近くに住む、一人暮らしのパアチャンの家に預けられる。ここで、退屈な一日を過ごす。究極のフリーターだもの仕方ないさ。たいていは陽だまりで昼寝をしている。

帰宅したオヤジが晩御飯の後、十五分ほど歩いてボクを迎えに来る。同伴でボクは帰宅する。晩飯を与えられ、一日を終え、寝る。この繰り返しだ。

ところがある日、オヤジが突然失業することになった。そ

う、リストラと呼ばれる出来事だ。定年が数年早く来た、ただけのことに過ぎない。にもかかわらず、かなり落ち込んで、何もする気がしないらしい。終日テレビの前でコーヒーを飲み、タバコをふかす日々が続くようになった。人生を振り返りながら、あの時、その時のことを感慨深く思い出しているようだ。先のことと考えられないのだから、過ぎたことに拘泥するしかないのだ。いずれこんな日が来るのは、わかりきったことだった。今更何もすることがないではすまされない。失職後の生活設計ぐらいは、前もって立てておくべきだったのだ。息子たちは家を出ており、カアチャンとオヤジの二人きりの生活なので、カアチャンは毎日イライラして、小言ばかり言う。

「うつつとうしいから、どこかにいっておいで。テーブルを挟んで、いつもわたしの右側に座っているから、頭の右側に円形脱毛症ができたわ」

「うん。おれの方は左側の頭部と肩がツねに痛いわ」
どこまでが冗談で、何処からが本気かわからない。こんな不協和音が家庭を覆うようになった。

以降、ボクの朝夕の散歩は、オヤジの担当になった。夏の暑い日は、できるだけ朝早く出かけ、夕方はアスファルトの熱が冷めてから散歩に行く。オヤジはアスファルトに手のひらを当て、温度を確認してから出かけるようになった。一応ボクに対する配慮なのだ。寒い冬の朝は、日が昇って気温が上昇してから出かけ、日が沈むころには夕方の散歩をする。そんな単調な日々が続く。朝夕、三時間程度の散歩になる。

その間がカアチャンの憩いの時間となる。甘いものをつまみながら、コーヒータイトムでくつろぐ。

ボクは駐車場が好きだ。契約者の少ない青空駐車場。日影がないので、夏には不向きだ。でも草も豊富で、テニスボール遊びも楽しめる。次に大手電気量販店の駐車場。日影で雨に濡れない。自動車数が少なく、スペースの広い場所なら最高さ。風通しがよく、夏は涼しい。雨露もしのげる。疲れたら、オヤジに撫でてもらいながら、座り込む。眠くなれば、腹這いになって、ウトウトする。また走り回るのは無理だが、いつも満車のスーパーマーケットの駐車場。オヤジは店外のベンチに腰かける。ボクは側にしゃがんで身体を撫でさせる。

ベンチに座っていると、様々な人と出会う。店が開店するまでは、ウォーキングの初老の男がやってくる。決してボクたちに話しかけない。こちらから挨拶しても、知らぬ顔。身体をほぐすと、缶コーヒードくつろぐ。次に糖尿病の中年女性、一キロの鉄アレイを両手に、軽く体操する。ヘモグロビン・エーワンシーの数値も下がり、病が軽快したらしい。めでたしだ。あとは、荷物搬入のトラックが数台と、収集車も必ず来る。出勤の従業員とも軽くあいさつを交わす。休憩に納得すると、次のところへ移動する。

また日が沈むころは、買い物客でにぎやかだ。自動車のライト、テールランプの点滅が楽しい。知り合いの客が声をかけてくれる。ボクは温厚な性格で、決して争い事はしない。やさしい目をしている、と誰もが言う。

このベンチ、夕方以降は朝と違う人たちが集う。ボクたちが立ち寄ると、いつもかき揚げを右手に、左手にビールをもつ爺さんがいる。食べ終わり、缶の中身がなくなると、何かに踏ん切りをつけるように立ち上がる。話したことはない。歩く後ろ姿に力がない。どこに帰るのだろう。

もう一人、まだ年金を全額受給できない年齢の、初老の男がいる。ベンチに来る時間から判断して、仕事はしていないようだ。タバコと缶コーヒーが好きだ。煙の臭いだけでくしゃみが出る。いつも、なぜか防寒防水ズボンをはいている。冬だけでなく、夏も同じだ。薄汚れた感じがして、気にかかる。朝は他所を歩く姿が見える。タバコとコーヒーのノルマを終えると、そそくさと立ち去る。歩き方は力強い。

最後に、ボクとオヤジ、毎日幾人かの人に話しかけられる。ボクが話せないだけ、オヤジが話す。おかげで退屈も癒されるということだ。誰もが皆、ボクを撫でていく。

夜寒くて暗い住宅街を歩くよりも、車のライトやテールランプが見れる場所がよい。車道を行き交う車を、オヤジは黙って見ている。来し方のがよかつたこと、悪かつたことをいつも反すうしている。後悔したり、満足したり、静かにしながらも頭の中はめまぐるしく動いている。古い先短いのだから、過去や未来を思い煩うのはよくないさ。どんなときも、今が最高さ。オヤジもいい加減にしないとね。

こんな平凡な日々が過ぎていった。この頃から目が見えづらくなってきた。白内障らしい。人間様なら手術だろうが、ボクたちはそのまま放置される。見えなければ周囲がこわい。

人の判別が困難になる。声か匂い、触られる感触の判断になる。他人と間違つて、家族にも吠えかかることが増えた。知人だと判断できるまで、時間がかかるようになった。

全力で走るのが辛くなった。医者に診てもらうと、心臓肥大の症状があるらしい。飛んだり、歩いたりするときに、一瞬の心停止状態になる。痙攣して失神する。それでも生きろしかない。一、二年経過する頃には、そんな症状がひどくなった。家の中の小さな玄関口で毛布を引いて寝ていたが、衰えを隠すことが出来なくなつた。とうとう家の中のフロアリングで寝ることになった。

ボクは終日家の中を徘徊した。壁に頭をぶつけても、そのまま真つ直ぐに歩くことしか知らなかつた。大きな声でオヤジに名を呼ばれて、一瞬我に返り、振り返るのが精いっぱいだった。ジュータンの上で大小便をした。しゃがむのさえ危うかつた。身体を支えてもらいながらの排便になつた。当然垂れ流し状態にもなつた。オヤジは息子たちの下の世話さえしなかつたが、ボクの後始末は、文句も言わずに黙々とこなした。おかげで人間様の介護について、オヤジの意識改革にも貢献した。

陽だまりにも出してやろうという、カアチャンの配慮で、猫の額ほどの小さな庭に出してもらつていた。だがある日、門扉が開いたままになつていたことがあつた。宅配、ガス、電気メーター検針が原因か。玄関口から数段の階段を転げ落ち、門扉にぶち当たり、そのまま戸外へ転げ出ってしまった。自分がどこにいるのかもわからず、ただたまたまと歩き続

けた。目が見えず、どこへ行つてよいかもしれない。歩き続けると、聞いたことのある水の流れる音がした。オヤジと一緒に散歩を思い出した。音の聞こえる道を歩き続けた。一瞬身体が浮いた。全身、水を感じた。川に落ちたのだ。必死で身体を起こした。カアチャンを呼んでみるが、声がまったく届かない。何度も転んでは水を飲んだ。息苦しくなつてほとんど動けなくなつた。誰かが、ボクを抱えた。わざわざ川に降りて、ボクを助けてくれた夫人がいた。その人の家に連れて来られた。ボクは泣き続けた。数時間後、捜索中のカアチャンに見つけられた。震えが止まらなかつたが、まだ寒い季節ではなかつたので、命拾いをした。

肺に水がたまつていたので、一日の入院が施された。退院後、三か月目にカアチャンがボクの新しい檻を組み立ててくれた。新調で目新しい物なので、その作業を見守つた。徘徊防止のためにここに入れられるのだ。仕方ないとあきらめられた。疲れたので、寝ようと、玄関口に敷かれた毛布に飛び降りた。体を横たえた。すると、意識がなくなつた。いつものことがやつてきた。ボクは初めて丁寧に葬られた。動物用の火葬場で茶毘に付されたのだ。カアチャンは当然、オヤジも悲しんでくれた。

カアチャンは、いわゆるペットロスに陥つた。毎日大型スパーのペットショップに出かけては、生まれて間もない赤ん坊の犬を見に出かけた。オヤジも付き添つた。一月程度は通つたのだろうか。

たまたま、生まれて一か月程度になる子犬ばかりの展示が

あつた。小さな段ボール箱が山積みになれ、各箱には、子犬が入れられていた。一か月程度で売り出されるのは普段はないそうだ。実はボクもその箱の中にいたのだ。カアチャンとオヤジは何匹かの犬を取り出してもらつては、抱いていた。その中の、真つ白な柴犬をカアチャンが抱いた。

「この子はマイケルと全然違う。もつと男前だつた」

よく言つてくれるね。まだ赤ちゃんだから、将来どれだけイケメンになるかれないよ。カアチャンはボクをオヤジに手渡した。受け取つたオヤジは、しげしげとボクを見ていた。ボクの目を覗き込んで、オヤジは心の中で思つた。眼の奥から、マイケルがこちらを見ている、と。

「これ買おう」

この一言で、またぞろオヤジの元に帰ることになつた。これが運命だ。それならもう一度と言うしかない。

ボクは今日も、平凡で退屈な日々を過ごしている。でもこれで充分だ。スパーマーケットのベンチで見かけたなら、声をかけてほしい。黒柴のマイケルから白柴のマリオに、姿も名前も変わつているけどね。時が経過すると、ボクもオヤジも、違う姿に変わつていくかもしれないよ。

了

※この作品については、筆名は赤木マリオにします。

赤木健介